

## 限定・軸・位階をめぐる問題 韓国伝統集落の「場所」

山中冬彦

家政学部住居学科

(2001年9月13日受理)

### Problems of Concepts “ Definition” , “ Axis” and “ Hierarchy” “ Place” in Traditional Korean Villages

Department of Housing and Design, Faculty of Home Economics  
Gifu Women's University, 80 Taromaru Gifu, Japan ( 〒501 - 2592 )

YAMANAKA Fuyuhiko

( Received September 13 , 2001 )

#### I . はじめに

韓国の集落は、60年代の工業化にはじまり、70年代のセマウル運動・住宅改良事業などをへて今日にいたるまで、激しい変貌過程にある。たとえば、今日古態を残す習俗を尋ねて農山村を踏査するとき、集落への道が自動車道路として真新しく舗装されているのをしばしば目にする。

しかし、農山村が縦横に走る自動車道路網によって都市との結びつきを強め、近代化されつつあることをみとめながらも同時に、それら集落のなかに多くの伝統的な空間構成要素をみとめることはそれほど難しいことではない。

韓国の集落は背後を山に囲まれ、緩やかな傾斜地に集村として位置することが多いが、ここでそのような伝統的な空間構成要素に具体的に言及する前に集落(マウル)の全体イメージを粗描しておこう。それは集落を同心円的に捉え、中心にある住居域 その外周境界の共同域 さらに外周の田畠など生産域および山林といった配置<sup>2</sup>を仮定するものである。すなわち、次ようになる。

- 1) 民家が集中立地する住居域レベル。  
ここをマウルとよぶこともある。
  - 2) 住居域外周部に位置し、共同体的施設や神域が点在する共同域レベル
  - 3) 田畠など生産域や周囲の山竝などを含む集落の地形的なレベル(行政上の集落領域を越える場合もある)
- さて、3)の大きなレベルから順に伝統的な空間構成要素についてあげてみよう。この集落レベルにおいては、既にふれたように背後からを山に囲繞されて、緩やかな傾斜地に集村として位置していること、また前方には集落へ接近する道と河川などの水系や水田がひろがっていることなどが挙げよう。
- 2)のレベルをとれば、住居域周辺 3)や1)のレベルにもあるが に立つ老巨樹などの際立った樹木の存在をあげることができる。それらはしばしば共同体的な信仰対象となっている(写真1)。それ以外にも神域としては、鳥形の彫木を頂に載せた長竿(ソツテ、写真2)、大小種々の立石(写真2)、ケルンのような堆石(チョタブ、写真3)、顔面を彫った柱状の木や石(チャンスン)、堂祠、墓所、共同井戸などがあげられる。

さらに茅亭(モジョン, 写真1)や亭子(チョンジャ, 写真4)と称する四阿風建築が住民の休息の場として素朴で力強い造形性をもって存していたり, 数は少ないが学問に関わった書院, 墓地に関わった斎舎などを残すところもある。

1)の集落の住居域に入れば, 地域ごとに伝統的な型をもつ一般民家とともに, 班村(李朝時特権的な支配階層であった兩班のすむ村)であった集落では住居域の後部に宗家筋の堂々たる伝統民家が保持されている。



写真3 チョatap(道の左右二対)  
——全北・淳昌郡東溪面於峙里



写真1・堂山木と茅亭(左)  
——全北・扶安郡保安面牛東里バンゲ



写真4 亭子「三龜亭」とマウルスブ  
——慶北・安東郡豊山邑素山洞



写真2 ソツテと立石=堂山石(右下)  
洞祭時のソツテ建て(註2拙稿参照)  
——全北・高敞郡新林面茂林里イムニ

以上集落の伝統的な空間構成要素の主たるものをあげた。ここでは家屋内のレベルまでは言及していないし, この構成要素のとりあげ方自体が研究の関心と相関して相対的なものと言えよう。

集落空間はそこに住むひとびとの日常生活の功利的背景(例えば, 生産や交通に関わることがら, 班分け, 相互扶助組織である「契」, 男女の活動領域の分担等など)によって分節構造化されているが, 同時に, 共同体的な儀礼を含むところの歴史的に複雑に重なった思想・信仰的な背景をとおして, 共同的な意味や風景として構造化されている。ここで取り上げる空間構成要素はこの後者に照準を合わせている。

集落空間のなかで私たちが関心をもつのは、前者の土地利用的な機能論的な構造よりも、後者の住まう人々の世界を表出する象徴論的な空間構造にである。そしてさらにいえば、伝統的世界のスタティックな空間構造というよりは、その世界の意味深さと豊かさを垣間見せてくれる過程的で重層的な「場所」の構造<sup>3</sup>にである。

また伝統といっても、もとより不変ではなく歴史的な性格をもつものであるけれども、象徴的な要素は機能的な要素に比べて時間的な変化が緩慢であり、その点でこのような空間構成要素は相対的に捉え易いと思われる。

以上のような関心・目的を持って韓国の集落空間に関する先行研究を学び、私たちの問題設定とそれへの接近方法に輪郭を与えるのが本稿の意図である。したがって予備的な考察であり、集落空間研究への序論にあたる。

あらかじめ、本稿の考察の方向を記せば、1、この国における思想・信仰的背景としては、巫教(巫俗)、道教、仏教、風水思想、儒教、キリスト教などが挙げえようが、集落の空間構成要素の背景として主に何を考察すべきであろうか。(節)

2、上のような思想・信仰的な背景によって空間構成要素が現われ、風景としての構造化する時、それを捉えるどのような空間概念が先行研究にあるのか。(節 - 1)

3、そのような空間概念にはどのような問題があり、どのように発展、展開することが、私たちの関心にとって稔り豊かな結果をもたらすであろうか。(節 - 2, 3)

## II. 背景としての思想・信仰性

冒頭にあげた集落の空間構成要素をその思想・信仰的背景を考えながら再度見ていこう。

1、集落背後の山は、多く集落の北側に位置し、機能的に云えば厳寒期の北からの寒風

を防ぎ、小高い南斜面は平坦地より多くの日射を期待し得るものである。集落前の河川は集落の排水に益し、いうまでもなく水田耕作に適する土地を提供する。しかしそこに住む人にとっては背後の山をはじめ周囲の山々や水系は単に便利のためにだけあるのではない。まずそれらは「風水思想」の上で重要な山であり水である。

風水思想<sup>4</sup>の意図とするところは、地中を運行する生気をいかに効果的に得るかを通して人の吉凶禍福を操作しようとするものである。上述の周囲の山々や水に関して言えば、生気の運行は地中=山脈(山は龍と呼ばれ、その龍脈を看ることが重大事となる)によってなされ、山によって蔵せられた風と生気は「四神砂」と呼ばれる集落周囲の山や水系によって集められることになる。四神砂とは集落背後の主山である玄武、前方の山や水系である朱雀、左側にある山の青龍、そして右側にある山の白虎をさす。すなわち集落はその後ろから左と右に抱きかかえるように山が伸び、集落前方を河川や山などが囲む形が理想型になる。(図1)。

これら四神などの山や水が形づくる形勢が「形局」といわれ、形局の中心として生気が集まるところが「穴」やその前の「明堂」とされる。

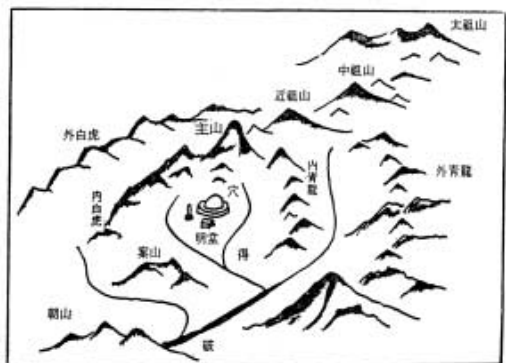


図1・風水概念図(崔昌祚, 註5, p. 61)

風水説は生気をうける対象にしたがって、死者の住まいである墓地に対する「陰宅風水」と生者の住まいに対するものにわかれ、後者はさらに「陽宅風水(個人の住宅)」と「陽基風水(都邑集落)」にわかれる。

歴史的に見れば、「陰陽論と五行説を基盤にし、周易の体系を主なる論理構造とする中国と韓国の伝統的な地理科学であり、追吉避凶を目的とする相地技術学」といわれ、統一新羅時代にこの国に移入されたとされる<sup>5</sup>。

この思考はきわめて空間的であって、韓国の伝統的な集落空間構造を扱うときには欠くことができず、そして実際集落の先行研究でも言及されることがきわめて多い。

2, つづいて2) レベルである住居域外周辺を見て行こう。際立った樹木のなかには、堂山木(タンサンモク, 写真1)と呼ばれるものがある。「堂山(タンサン)」は洞祭(部落祭)の祭場・神域である。堂山には小規模な堂祠がある場合もあるが樹木だけの場合ははるかに多く、より古い形であるといわれる<sup>6</sup>。

堂山は上の3) のレベルでふれた集落の背山に位置することもある。

堂山は共同体の儀礼である洞祭<sup>7</sup>の際には、農楽隊が鉦や太鼓を打ち鳴らしながら集落内を巡廻し立ち寄る場処である。そこは祭官らが祭祀をおこなう祭場であり、神霊が降臨する神域でもある。堂山での祭祀は儒教的な形式が習合しているが、農楽隊の歌舞賽神からうかがえるように洞祭はもともと主として「巫教」的な民間信仰に溯るといえる<sup>8</sup>。

ここで巫教あるいは巫俗については、その二つを使い分けている柳東植の説明が有益である<sup>9</sup>。彼は巫教を先史時代から今日にいたるまで様々に現われるシャーマニズム的な宗教現象自体についての総称でもちい、巫俗は今日われわれが見ることができる民間信仰のなかで

いわゆるシャーマニズムといわれる現象にどうか。巫俗は巫教の一部であり、古代巫教の残滓現象であって、韓国民間信仰の中心をなしているものである。巫教、巫俗は歌舞を通して神霊との直接的な交渉をもち、神霊の力によって人生問題を解決しようとする宗教現象と解されている。

以上のように神樹として樹木は巫俗の信仰対象であるが、しかし樹木は単にこのような民間信仰を背景にもつだけではない。すなわち風水では集落の形局を補完したり(裨補-ヒボ), あるいは他所から不吉な影響の及ぶのを防ぐ(厭勝-ヨブスン)のために、集落の要所に樹木や樹木群(マウルスプ 写真4参照)を人工的に造成することがあるからである。

また既にふれたソッテ・チョタブ・チャンスンは集落を守護する境界神的な神格と考えられるが、風水上のヒボやヨブスンとしても造成される。

住居域の外側に位置する墓地についていえば、「孝」を重んじる儒教的背景はもとより存するが、既にふれたように、風水では墓地を吉地に相して、子孫の繁栄を計らんとするために位置や方向その周囲の造成などに配慮される(写真5)。すなわち、ここでは儒教と風水は対立することなく接続している。



写真5・墓地

——全北・高敞郡新林面茂林里イムニ

また樹木群(マウルスプ)は、先祖が風や洪水を防いだり、風水的なヒボやヨブスンの目的で造成し、それを後孫たちが、先祖への「孝」としてその維持管理をつづけているものである。儒教的背景といえよう。ここでも風水と儒教はなめらかに接続している。

また集落の入り口=洞口(トング)に建つ先祖たちの種々の顕彰碑や閣、儒学的な郷村教化かかわる書院、始祖墓の管理や墓参とかかわる齋舎なども儒教的背景をぬきには成立し得ない。

3、つづいて3)レベルの住居域内を見ていこう。班村における民家の配置をみると、傾斜地に位置する集落の奥まったところに入郷祖や宗家が位置し、その前方下位に同族の後孫たちの家屋、さらにその前方に他姓の家屋というヒエラルキー的秩序が指摘される。<sup>10</sup> 例えばチョン・ムウン<sup>11</sup>はそれを図2のように図式化している。

これは儒教的な背景から理解されることがからである。儒教のいわゆる名分論(正名論)的な考えによれば、よく知られた「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり<sup>12</sup>(顔淵篇)といった身分的階層的な区別を社会の秩序の根本とするのであり、そのような思考が図のような上下関係的な空間的分節の背景といえるからである。

ところで風水的に見ると、宗家・祠堂は前述した形局の「穴」に位置したと考えられる。ここでも儒教的秩序と風水は対立することなく融合しているのである。

4、以上のように集落の空間構成要素を見ていくと、風水思想、巫俗を中心とする民間信仰、儒教の三つの契機とその重なりが、背景として際立っていることがわかる。

他の契機についていえば、仏教は李朝の崇儒排仏政策などもあって、また道教は巫俗と親しく習合しており<sup>13</sup>、キリスト教の布教黙認は19世紀半ば以降と比較的新しいこともあり、背景として一般的には取り出すほど際立っていないのである。

ところで問題になるのは、風水は民間信仰に包含されるのではないかという、いわば風水の思想的な位置づけである。例えば金泰坤は風水を民間信仰に含めている<sup>14</sup>。

ここで想起するのは、漢城(ソウル)遷都時の宮闕の方位(坐向)に関する有名なエピソードである。無学という神僧は、西の仁王山を鎮山にして、北の白岳と南山を左右の龍・虎にするのがよいとした。それに対して、大学者鄭道傳は、帝王はすべて古より南面して国を治めるものであると説いた。鄭道傳の説が聞きいれられたが、無学はわたしの説に従わないならば200年後にわたしの言葉を覚

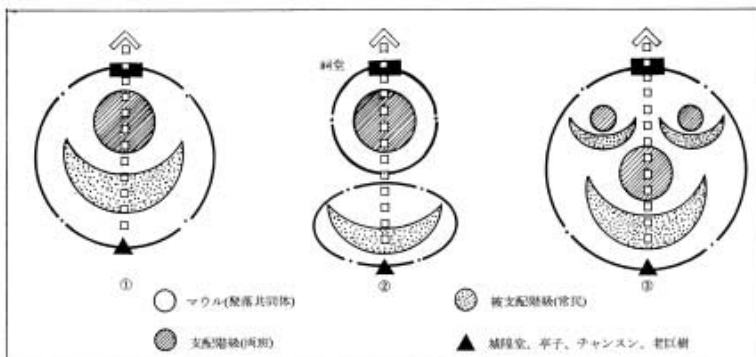


図2・伝統集落の住居分布モデル(チョン・ムウン, 註11, p. 71)

る時が来るだろうといった。はたせるかな、国には世祖反正の変が起り、壬辰倭乱が起こったというのである<sup>15</sup>。この伝説は都邑のような空間的な選定において、儒教と風水が明確に対立しようと人々が考えていたことを示している。同時に国家のイデオロギー的な支柱である儒教が都城の立地を通して国家のありかたを左右するのは当然としても、民間信仰ともいわれる風水がそのような国家的な命運を左右する思想であったと考えられるとともに、同じ民間信仰としての巫教がそのような思想ではなかったことが分かるのである。このエピソードは三つの思想・信仰の性格の相違を際立たせている。

集落空間に関心する私たちとしては、風水を一つの契機としてたてる方が考察にとって有効と考えるが、これは研究対象に対する関心・目的と関わっており相対的なものであろう。例えば、家祭や洞祭について論じた秋葉隆は、伝統的な朝鮮の社会や文化は、「女性を中心とする巫俗的文化の運載者と、男性本位の儒教文化の支持者の二重組織において理解される」と記した<sup>16</sup>。すなわち、巫俗と儒教の二契機をたてており、風水は大きく問題になっていないのである。

したがって三つの背景をたてることは仮設性を免れず、その有効性は具体的に集落の方位論などによってあきらかにすべきであろうが、本論内でいえば次節の空間概念の考察からも幾分かあきらかになると思う。

なお、集落の樹木群（マウルスプ）を詳細に研究した金学範、張東洙<sup>17</sup>はその形成背景として上の三契機を立てている。

### Ⅲ．空間概念とその可能性

集落のさまざまな空間要素が思想・信仰を背景としてうかびあがり、どのように空間的に関係づけられ構造化されるのであろうか。

そのような観点から興味深い概念として、「限定」・「軸」・「位階」がある。これらの概念は韓国の集落空間を分析する論考の中に頻見するものであるが、私たちはこれの検討からはじめたい。

#### 1. 三つの概念について

「限定」は集落の領域・範囲を限ること、境界づけることである。「領域化」「内部空間化」という言葉をつかう論者もいる。限定や境界が集落空間の分節にとって重要であることは言うまでもない。境界は空間秩序の主要な決定因であり<sup>18</sup>、限定（definition）とはまさに定義（definition）と同義ともいえよう。

内と外とは限られ、出入りが統制され、限定された内と外とは何らかの性格上の相違が存し、内はしばしば帰属感・アイデンティティ・庇護性などを与えることになる。

ところで韓国の集落の限定あるいは領域境界としてしばしば言及されるのが、集落を圍繞する自然地形的要素である山並や水系であって、それは前述した風水地理の形局の四神砂すなわち後玄武、左青龍、右白虎、前朱雀に他ならない。

そのような風水的な領域境界を扱った例としては、時期的に早いものとして金鴻植<sup>19</sup>、張聖浚<sup>20</sup>の論考がある。前者は李朝の実学思想研究をベースに、風水説をふくめた伝統的思考を合理的側面から生かそうとしている。また、そこには地域性や伝統性を理解することのないセマウル運動期の画一的な居住地計画への批判が読み取れる。

後者張聖浚の二つの論考は「限定」・「軸」・「位階」・「坐向」の概念をセットにして韓国集落空間理解に提起したおそらくもっとも早いものとおもわれる。「坐向」については後にふれるが、この論考で張は興味深いことに、この山と水である境界要素について、「これらは日常性ではなく聖に属し、未知の

世界、想像の世界である」と指摘し、さらに「この四神がつくる山の稜線はハヌル(天空)世界と境界をなし、水は地下世界との境界である」という。これは集落の限定あるいは境界という概念が単に地形上や行政上の領域ではなく、集落に住まう人にとって象徴論的文脈で了解されうることをよく示している。

風水的な自然地形以外の限定はないのかということが当然問題となるが、それは - 3 で述べることにして、ここで集落の他の限定のしかたとして、集落を同心円的な多重構造で捉える考えがあることにふれておくべきであろう。金鴻植は前出の論考で図3のような図式を紹介している。これは主に土地利用的、機能論的な区分によるものであって、象徴論的な構造に部分的に重なるとしても(例えば住居域とその外周部の堂山の関係)、それに関心をおいて提起されたものではない。なお、本稿の最初に説明のために仮定した集落の三つのレベルはこれと同じ土地利用的な考えで仮設されている。

「軸」に移ろう。集落に近づくとき、集落入り口から背後に向けての方向性が強く体験されるのであるが、軸という概念は、このような集落前方から集落内部をとおる、その背

後の山竝まで貫ぬく連続する全体的な方向性、集落が共有する(集落入り口部トングをふくむ)方向性のことと言える。韓国の集落はすでにふれたように一般的に山を背後にして南面の傾斜地に位置するゆえに、この軸は南北方向が多く、土地の高・低と重なりながら上昇する。

その軸は集落内道路と重なることもあるが、それと一致しなくても、視覚的、想像的に体験され、集落全体を方向づけているものである。その点ではK・リンチのパス(path) = 道路とは一致しないが、Ch・ノルベルグ = シュルツの通路(path)とは重なる。シュルツはこの概念によって視覚的な軸線まで含めて考えるからである。

この軸は風水でいえば、朝山 朝水 案山 内水 明堂 主山 祖山と結ぶ方向<sup>21</sup>である。(図1参照) 端の祖山は集落から遠く離れ、生気の流行する龍脈に関わるとされ、韓国風水では白頭山などがあてられるが、集落からみればそれは未踏の彼方である。それゆえに軸もまた四神砂による形局的な限定と同じように象徴的意味を担う方向となる。

また、堂山としての神樹が多くの場合に集落入り口や背後の山に位置することがこの軸を強めている。さらに儒教的側面で言えば、宗家や祠堂の位置がこの軸の構成に参与することになる。

このように、軸は風水・巫俗的民間信仰・儒教に密接に関わって構成されているのである。

軸と結びつきやすいのが「位階」という概念である。位階は上下関係的な秩序を指しているといえるが、すでに上で述べたように背山した傾斜地に立地する集落には地形的な高低位(=位階)があり、また同族マウルでは一族(門中)の宗・末によって社会身分的な高低位(=位階)がある。この二つの高低位

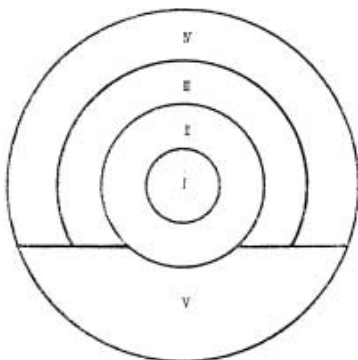


図3・自然部落土地利用形態  
 I 住居地, II 個人菜園, III 個人耕地(麻畠)  
 IV 共同燃料林, V 個人耕地(田)  
 (金鴻植, 註19, P. 48)

が一致することが一般的には理想的な配置とされる。

門中の中核をなす宗家や祠堂の位置は風水の形局でいえば穴であり、いわば価値的な中心にあたる。しかし集落の中心は同心円状ではなく、集落の軸線によって、集落の前後関係として分節されることになる。

このような分節は上でみた風水や儒教的背景のみならず、巫俗を中心とする民間信仰によってもおこっている。すなわち、集落背後の山腹に洞祭をおこなう堂山木などの堂山があり、集落入り口にも堂山がある場合、前者を上堂といい後者を下堂と言ったりするが、洞祭時にはまず上堂の祭祀からはじまり位階の低い下堂の祭祀に移るのがつねである。

集落入り口付近は他にも前述したソツテ、チャンスン、チョタツプなど堂山神に対して下位神とされるものたちの祭場にもなる。

以上からわかるように、位階は集落の後ろが高く入り口付近が低い(図4)。また、位階という空間的構成は風水・巫俗的民間信仰・儒教にも関わっていることが明瞭である。

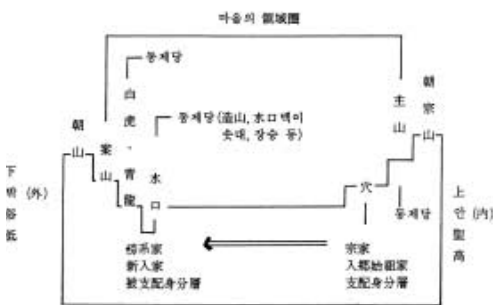


図4・集落領域圏の断面と垂直的空間秩序 (李榮鎮, 註34, p. 278)

位階の中心である宗家・祠堂は儒教的「祭祀空間」として聖性を帯びており、したがって位階は儒教的に見てもは社会身分の意味だけではなく、象徴的、宗教的意味をおびてい

る。

## 2, 坐向と身体性

前述したように張聖浚は上の三つの概念とともに「坐向(チォアヒャン)をあげている。これは一つひとつのある場処において、ある選ばれ優越する方向が存する場合に用いられる空間概念であり、例えば風水の形局でいえば、山は向天的であり、形局の水は向底的といわれる<sup>22</sup>。おのおのの家屋や家屋各部の坐向を分析することもなされている<sup>23</sup>。

一般の「方向」とは違うのは一つの場所にはいろいろな方向が存するが、坐向は一つだけ存する点である。

もともと坐向という言葉は風水説の用語であり、次のように説明される<sup>24</sup>。穴の中心、陽基ならば主屋を建つる処、陰宅ならば棺を蔵する処を「坐」と云ひ、この坐の正面する方向を「向」と云う。(中略)これを定めるには明堂(内明堂)の中央に指南針を置き磁針の回転軸と坐とを結びつけた線が甲方位の上を奔る時この坐を甲坐と呼び、この線の延長線が反対側の乙方位を奔るとき之を乙向と呼ぶ。

本来はこのように穴から見た正面する方位と明堂からみた穴の方位を指南針(羅経)によって決めるものであり、あくまでも穴の坐向が問題になっている。しかし坐向は風水説において、穴の坐向をはなれても、たとえば山や水の流れの方向など方向問題全般に関わって用いられることがある。したがって集落研究の坐向概念は後者のより広い意味に連なって使われていることがわかる。

さて、この坐向は限定・軸・位階と四つならべて使う論者は張聖浚以外にもいる<sup>25</sup>が坐向は他の三つ概念と水準が違うのではないだろうか。すなわち、限定・軸・位階は複数の空間要素を連関させ構造化する空間的シエマである。ところが坐向はあくまでも一つの空



間要素あるいは一つの場処の特性である。例えば「鎮山と宗宅が集落空間の軸を成し、集落の坐向が決定される<sup>26</sup>」というとき、たしかに「坐向」は集落の空間要素である住戸群を連関させているようにみえるが、この坐向の方向は軸の方向に他ならないのであって、ここでは集落を一つの場処とみているにすぎないと思われる。もとより「集落の坐向」というときには「集落の軸」とは異なるある意味が加わるであろう。

ところで、坐向概念が穴=坐を中心とすることについて再び考えてみよう。

穴を取り囲む山勢について、東晋の郭璞が著したと仮託される葬書（錦囊經）は風水的な地理書の源流として尊崇されているが、「以左為青龍右為白虎前為朱雀後為玄武」と記す<sup>27</sup>。すなわち穴を中心にして周囲の山や水は前後左右に位置づけられている。穴が南面するときをはじめ、青龍=東、白虎=西、朱雀=南、玄武=北に合うことになる。したがって東西南北よりも前後左右が優先しているのである。

この点に関して西垣安比古<sup>28</sup>は、ここには「穴」の中心におかれた「身体」が前提されており、坐と呼ばれるかぎり、坐すという身体姿勢が前提されていると考えてよからうとしている。さらにかれは、坐向のもつ穴=坐と明堂との「方向づける 方向づけられる」という関係によって朝鮮の住宅のマルとマダンについて場所論的な言及をしているのであるが、ここには「坐向的論理」ともよぶべき「見る 見られる」という身体的な視線の再帰性が示唆されていると読み得るのである。もとより、ここでの視線は視覚に限定されたはたらきではなく、M.メルロ=ポンティのいう「共感覚」<sup>29</sup>的なはたらきであって、再帰性とは「感覚的なものの再帰性」<sup>30</sup>というべきであろう。

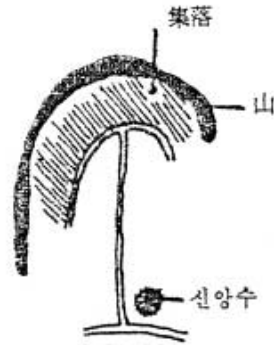


図5・集落の領域概念図  
図の下方点は信仰樹  
(曹成基, 註32, p. 50)

このような身体性は住宅だけではなく集落空間に接近するときにも重要な方法として関わってこよう。例えば、このような観点からみれば、上述した「集落の坐向」という言葉には、「集落の軸」よりは明確に住む人たちの身体性が前提として潜んでいることが分かるのである。

### 3. 問題の所在と可能性

以下、本稿を結ぶにあたって限定・軸・位階についての問題を考えてみたい。

限定に関しては、すでに - 1 でふれたように周囲の山の稜線や川など自然地形だけが限定ではなく、さらに集落内外の他の限定=境界はないかということであった。

その点で興味深いのは韓弼元であり、かれはその集落空間研究<sup>31</sup>でマウル(集落)に住む人に「マウル」の境界たずね、地図に書き入れさせるといった試みをおこなっている。この結果は住む人のマウル境界の理解が決して一つではなく、多重的でゆらいでいることを示している。

興味深い論考をもう一つあげてみる。曹成基<sup>32</sup>は限定という言葉は使っていないが、集落の領域を論じながら図5をあげている。ここでは領域の限定が山勢の線的な連続で馬蹄形にイメージされているわけであるが、集落

の前方では信仰樹になっている。論者が堂山配置と領域限定について一般的にどのように考えているか論文内容からは明らかではないが、ここには領域の境が点になること<sup>33</sup>が示唆されている。

また李栄鎮<sup>34</sup>は、集落の「観念的領域圏」は風水的な説明体系の立地地形と洞祭堂(=私たちの云う堂山)の位置およびイメージで理解されると指摘している。堂山は既にふれたように樹木・堂祠・立石など点的である。線やエッジ的ではないこのような点的な限定は韓国の集落でどのような領域の構造化をみせるかが、関心をひく<sup>35</sup>。

次に軸に関して生じる疑問はその軸と交差する方向(一般的には東西方向になるが)はこの国の集落では構構的にはたたらかないのかという点である。これに言及する論考はほとんどないように見える。

その点で興味深く思われるのは樹木や立石など堂山などの集落内での配置である。多くそれらは集落の軸上で議論されるが、そのような神域は集落の東西にも存するからである。堂山木の軸上の配置に関しては齋木崇人<sup>36</sup>や崔徳源<sup>37</sup>が言及しているが、堂山木・チョタブ・立石の配置については表仁柱<sup>38</sup>が「五方位」構造を示しているのが示唆的である。なぜならそこでは「中央」が方位となるかぎり、「中央」以外の外からの視線が前提されており、先にふれた「見る 見られる」の再帰的構造が読みとりうるからである。

次に位階について問題になるのは班村における宗家や祠堂などの位階の高位点=中心と異質な空間構成要素はないかということである。

宗家・祠堂は儒教的な「祭祀空間」であるが、儒教的な空間として「修己空間」を忘れるべきではないだろう。それは自らを修し(居敬)、事物の理知を考究し(窮理)、儒教的な

人間の理想像たる「聖人」へと精進する空間である<sup>37</sup>。そのような修己空間の一つとして亭子(写真4)をあげよう。そこはまた儒教的な自然観を支えた場処ともいえる。

李朝の新儒学=性理学は図式的にいえば、原始儒家の礼を強調する名分論的で倫理的な社会観、自然と人間との調和合一を強調する道教の自然観・宇宙観、仏教の禅で云うところの無欲と静を強調する修養法の三契機を包摂している<sup>40</sup>とするならば、亭子は後の二つを支えているといえる。

朴彦坤はこのような脱世俗的な亭子空間を「形而上学を追求しようとする意図が強い韓国の特徴的な空間である」と指摘している<sup>41</sup>。亭子を集落空間の中に位置づける時、宗家・祠堂とどのような関係としてありうるだろうか。

限定・軸・位階が韓国の言説によく登場するのは、それが抽象度の高い分析概念というよりは、もともとこの国の人々の直接的な集落経験から発生してきた直観的でイメージ性豊かな概念であるからであろう。限定は隔てをもつ面的なひろがりであり、軸は眺め、眺められる線的な方向であり、位階的な中心は密度の高い結束点として経験されるだろう。

それらの限定・軸・位階は諸々の空間要素を結びつけるいわば連辞的な関係性であり、この三つの異なった関係性が重なっているのがこの国の集落空間の特異な点と考えられる。そしてそれらがともに超越的世界に開きうるのである。

ところで私たちはこれらの概念を分析の枠=道具として具体的な集落を解釈することが主眼ではない。すなわち、上の考察によれば、つぎのように考えられた。

\* 限定に関しては、一つの「図」的な限定ではなく、それと重なって潜在する「地」的な

境界のありかた。

\* 軸に関しては、集落を前後に貫ぬく明瞭な軸だけではなく、それと交差する潜在的な方向の分節のありかた。

\* 位階に関しては、集落の価値的な中心に対して異質な空間構成要素が共存するありかた。

これらに共通する視座は、限定する境界・軸・位階の中心が「図」として浮かび上がる時「地」化する潜在的なあり方に注目することであり、それによって、集落の「場所」のありようを見ようとするのである。

#### 註および参考文献

<sup>1</sup> 「マウル」は日本語の「集落」と同じようにいわゆる住居（集中）域をさす場合と、田畑などの生産域や山林原野などをふくむ村落全体のひろがりやをさす場合がある。ここでは後者の意でもちいる。

<sup>2</sup> 齋木崇人「韓国の堂木と集落の空間構成」日本建築学会大会農村計画部門研究協議会資料1993、72頁

および拙稿「巡廻と境界 韓国洞祭における集空間」日本建築学会計画系論文集538号2000、269～276頁

<sup>3</sup> 場所の重層性については、私たち世界内存在の世界は<虚空/世界>という「場所の見えない二重性」をなしており、この見えない二重性が見える二重性として世界内の局所に受肉すること（例えば聖なる時間、空間）や、世界を縁どるような形（例えば世界に対してのコスモス）になることがある、という上田閑照の考え方が示唆を与える。『場所』弘文堂、1992、『ことばの実存』筑摩書房、1997など

<sup>4</sup> 村山智順『朝鮮の風水』国書刊行会、1972を参照した。

<sup>5</sup> 崔昌祚『韓国の風水思想』民音社、1984、

p32（日本語訳三浦国雄他、人文書院、1997 35頁）

<sup>6</sup> 張籌根「韓国の神堂形態考」民俗研究論文選 一潮閣、1987p. 350

<sup>7</sup> 崔在錫は洞祭を共同で行う領域を以って自然集落の領域の重要な指標であるとした。『韓国農村社会研究』伊藤亜人、嶋陸奥彦訳学生社、1979、p. 29

<sup>8</sup> 柳東植「韓国巫俗の宗教的特性」民俗研究論文選 一潮閣、1982pp. 236～240

<sup>9</sup> 同上 pp. 235～237

<sup>10</sup> 例外もある。たとえば、18世紀以降宗家以上に経済的に優勢になった後孫が、宗家の後ろの風水の脈上に家屋を建てた集落例があげられる。朴明德「嶺南地方同族마을의 分派形態와 建築特性에 관한 研究」弘益大学校学位論文1991、pp. 321～322に詳しい。

<sup>11</sup> 정무웅「地域共同体的 전통과 現在」*Architecture & Environment*、1986、5

<sup>12</sup> 『論語』貝塚茂樹訳、世界の名著、中央公論社、1996、250頁

<sup>13</sup> 前掲書 8、pp. 244

<sup>14</sup> 金泰坤『韓国民間信仰研究』集文堂、1983 彼は宗教を人為的宗教と自然的宗教に分け、前者を仏教、キリスト教のように教祖による教理の文書化がされ、それを中心に体系化された組織をもつものとする。それに対して民間信仰はそれらの契機のないもの、すなわち自然的宗教とする。

なお、建築関係では、たとえば崔壹「韓国農村마을의 秩序体系에 관한 考察」

*Architecture & Environment*、1986、5などが風水を民間信仰に含め議論を進めている。

<sup>15</sup> 前掲書 4、pp. 697～699、歴史的な事実としては、無学と鄭道傳のあいだに意見の対立の記録はなく、対立は儒者と風水の術士の間であったことが指摘されている。（李榮鎮「漢陽遷都와 風水說의 敗退」『韓国史市民講座』14

輯 一潮閣, 1994)

<sup>16</sup> 秋葉隆 『朝鮮民俗誌』六三書院, 1954, 137~155頁

<sup>17</sup> 金学範・張東洙 『마을순』悦話堂, 1994

<sup>18</sup> 原広司 『集落の教え100』彰国社, 1997, 134頁

<sup>19</sup> 金鴻植 「마을空間構成方法에대한韓國伝統建築思想研究」大韓建築学会誌19卷64, 号1975, pp. 45~50

<sup>20</sup> 張聖浚 「마을의領域化에관한小論」明知大論文集第10輯, 1977, pp619~628, 「風水地理의局面이갖는建築的想像力에관한考察」大韓建築学会誌22卷85号, 1978, pp15~22

<sup>21</sup> 同上, 1978, p. 20

<sup>22</sup> 同上, p. 21

<sup>23</sup> 例えば, 延世大学校建築歴史理論研究室報告 『星州한개마을』(延世大学校出版部1991) では陽宅三要論に拠って兩班住宅の坐向を分析している。pp. 57~62

<sup>24</sup> 前掲書4, p. 20

<sup>25</sup> 例えば강선중 「農村自然마을의普遍的構造」 *Architecture & Environment*, 1986, 5

<sup>26</sup> 金徳鉉 「儒教的村落景觀의理解」 『韓國伝統地理思想』民音社, 1991, p207

<sup>27</sup> 前掲書4, 52頁

<sup>28</sup> 西垣安比古 『朝鮮のすまい』中央公論美術出版, 2000, 67~78頁

<sup>29</sup> M.メルロ=ポンティ, 竹内芳郎・木田元

・宮本忠雄訳 『知覚の現象学2』みすず書房, 1974, 39~41頁

<sup>30</sup> M.メルロ=ポンティ, 滝浦静雄・木田元訳 『眼と精神』みすず書房, 1966, 267頁

<sup>31</sup> 韓弼元 「農村同族마을空間構造의特性과变化研究」서울大学校学位論文, 1991

<sup>32</sup> 曹成基 「農村自然部落의集落形態에관한研究」大韓建築学会誌23卷88号, 1979

<sup>33</sup> 日本では原田敏明 「村境と宗教『宗教と社会』東海大学出版会, 1972が早く指摘した。

<sup>34</sup> 李栄鎮 「韓國伝統마을의空間構成体系에관한研究」『斗山金宅主博士華甲記念文化人類学論叢』1989, p. 264

<sup>35</sup> 拙稿, 前掲書2で解明を試みた。

<sup>36</sup> 齋木崇人, 前掲書2

<sup>37</sup> 崔徳源 『南道の民俗文化』밀알, 1994, pp. 112~115

<sup>38</sup> 表仁柱 『共同体信仰과神話研究』集文堂, 1996, pp. 91~96

<sup>39</sup> 前掲書26, pp. 196~197

<sup>40</sup> 同上 p. 194

<sup>41</sup> 朴彦坤 『韓國의亭子』대원사, 1989, p. 76  
 なお, 亭子に関しては安啓福 「樓閣밑亭子樣式을 통한韓國伝統庭園의特性에관한研究」 서울大学校学位論文1989が行った古文献分析与現地踏査を通した亭名分析与「八景」分析が示唆に富む。